

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL.01001)

近代科学はこのままでいいのか
－ゲーテが描くもう一つの近代－

(思想・文学分野)

近代科学はこのままでいいのか
－ゲーテが描くもう一つの近代－

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2013年8月21日開催の第1回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

近代科学はこのままでいいのか

－ ゲーテが描くもう一つの近代 －

昔から祭りは満月の夜に開かれてきました。“けいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」”はそんな満月の夜に「文明の未来と人類の幸福」について考える会です。高等研の庭にはゲーテの胸像があります。その視線は「フクシマ」のほうを見やりつつ、近代文明の現状を憂いているかのようではありませんか。けいはんな学研都市の建設理念は、「従来の近代科学技術文明を乗り越え、新たな地球文明を創造するために、西欧が生み出した文明の成果と自らに固有の東洋的文化を総合する」ことにあります。ゲーテの胸像はその理念のシンボルです。今宵、ゲーテに立ち返りながら、近代科学文明のあり方を一緒に再考してみませんか。

「2013年8月21日開催第一回「ゲーテの会」（発足会）における案内文から」

高橋 義人 (Yoshito TAKAHASHI)

1945年栃木県生まれ。

京都大学名誉教授、平安女学院大学教授。

Internationale Goethe-Gesellschaft（国際ゲーテ協会）理事、日本ゲーテ協会理事、日本学術振興会専門委員、けいはんな学研都市・町づくり専門委員等を歴任。

現在、日本学術会議連携会員、Gesellschaft für international Germanistik（国際異文化交流独文学会）副会長。

主著に『形態と象徴』（岩波書店）、『ドイツ人のこころ』（岩波新書）、『魔女とヨーロッパ』（岩波書店）、『グノーシス 異端と近代』（共著、岩波書店）、『グリム童話の世界』（岩波新書）、『10代のための古典名句名言』（共著、岩波ジュニア文庫）、ゲーテ『色彩論 完訳版』（共訳、工作舎）などがある。



目次

I 科学文明と人類の将来を考える

- (1) 「ゲーテ自然科学の集い」の創立
- (2) 古典を通して先達と対話する
- (3) 渡辺一夫のラブレール研究
- (4) ゲーテは現代の問題に答えている
 - ① 誰が現代の諸問題に答えてくれるのか
 - ② 17世紀の科学革命以降の科学のあり方を考える
 - ③ EUの基になった「世界文学」の試み
- (5) 答えは『ファウスト』の中にある

II 『ファウスト』に見る近代科学への批判 ～近代科学は錬金術

- (1) 近代経済学は錬金術である
- (2) 近代生化学は錬金術である
- (3) 近代の機械産業は錬金術である
- (4) 近代の土木事業は錬金術である

2013年8月21日開催

第1回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：近代科学はこのままでいいのか - ゲーテが描くもう一つの近代 -

講演者：高橋 義人（平安女学院大学教授、京都大学名誉教授）

（文中敬称略）

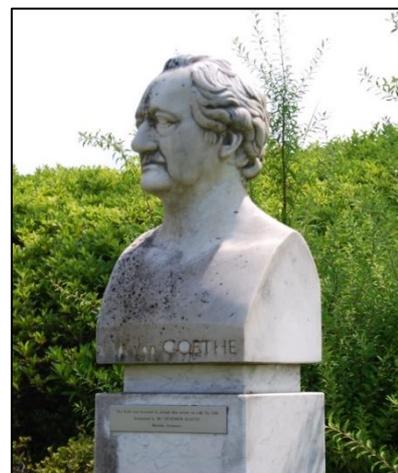
Ⅰ 科学文明と人類の将来を考える

（1）「ゲーテ自然科学の集い」の創立

この国際高等研究所（以下、高等研）の初代所長は、第19代京都大学総長を務められた岡本道雄先生である。本研究所のプログラムの3頁には「人類の未来と幸福のために何を研究すべきか」が基本理念として掲げられているが、これについては岡本先生が力をこめて何度も語っておられた。岡本先生は医学者として科学の発展、文明の進歩についてたえず考えてこられたが、科学の発展、文明の進歩がそのまま人類の未来や人類の幸福につながるかどうかについて、やがて強い危惧の念を抱くようになった。「科学文明と人類の将来」は人類にとっての今後の大きなテーマになると洞察した岡本先生は、当時、岡本先生が所長を務めておられた京都日独文化研究所のメインテーマとしても、「科学文明と人類の将来」を取り上げた。

「科学文明と人類の将来」について考えるならゲーテが最適だというのが、岡本先生の持論だった。そう考えられたためか、岡本先生が初代所長になられた折、クリング氏から寄贈されたゲーテ像をこの庭の中央に据えられた。つまり、ゲーテと高等研の間にはじつはとても密接な関係があるのである。

今、岡本先生が医学者としてゲーテに関心を持たれたという話をしたが、医者がゲーテに関心を持つことには他にも多くの例がある。ゲーテは文学者であるばかりではなく、画家でもあり、政治家でもあり、俳優でもあり、また自然科学者でもあった。特に科学者としてのゲーテは、ニュートン以降の近代科学が自然を分析するばかりで、自然の本当のすがたを見していないのではないか、このままでは近代科学は人類を誤った方向に導いていってしまう、と強く懸念していた。そういうゲーテ自然科学の精神を受け継ぎ、近代科学を批判的に検証しつつ、自然と人間とのより健全な関係を構築しようとして、昭和44年に「ゲーテ自然科学の集い」という学際的な会が発足した。私もこの創立に立ち会った一人であり、途中からは長いことこの会の世話役も務めてきた。創立時の会員には、千谷七郎（医学）、木村雄吉（生物学）、三木成夫（医学）、養老孟司（医学）等の高名な先生方がおられたが、彼らの多くは自然科学研究者だった。特に医学関係の人が多かった。医学というものは、生命や



ゲーテ像（国際高等研究所庭園）

人間について研究する。生命の謎、人間の不思議を解明しようとすることもあるが、それよりも前に、生命を守る、人間を守ることが医学の出発点をなす。生命の謎、人間の不思議を解明しようとするあまり、医学が生命を傷つけたり、人間の尊厳を損なったりするようなことがあってはならない。そういう医学の出発点に立ち返らせてくれるのがゲーテ自然科学だ。彼らはそう考えた。

(2) 古典を通して先達と対話する

先に名前を挙げた方々はゲーテに立ち返り、ゲーテを通して近代科学のあり方を再考しようとした。これらの先生方は、「ゲーテが今ここに生きていたら何と言うだろうか」としばしば考えた。ゲーテの精神に照らし合わせたとき、今日の科学文明のあり方は今のままでいいのか。それを考えたのである。

私事になるが、私は高校時代からゲーテが好きで、大学の学部でも大学院でもゲーテを探究してきた。つまり50年くらいはゲーテのことばかり追いかけてきたわけである。そういう私にある頃から変化が起きた。私はいま67歳だが、55歳を過ぎた頃からゲーテの声が聞こえるようになった。そう言うと、笑う方がおられるかもしれない。だが、本当である。ゲーテについての論文を書いていると、私の肩越しにゲーテが原稿を覗き見て、「違うな、違うな、俺が考えていたのはそんなことじゃない」と言うのである。大体は「ダメだ、お前は俺のことがまだ分からないのか」と言う。しかし、たまに褒められることもある。「よく分かったな。俺がこの時代に生きていたらそういう風に言いたかったんだ」と。

現実には200年前のゲーテの言葉が聞こえるはずもないので、当初は少々慌て、自分は少し頭がおかしくなったんじゃないか、呆けはじめたんじゃないか、とさえ思った。しかし、ゲーテと話ができるというのは、なかなか得がたい経験なので、あるとき、京都の僧侶や芸術家たちの集まりの席でこの話をしたことがあった。すると、芸術家の方々は、「何もおかしいことはない。まったく同じことを私もしている」「私にも死んだ師匠の声が聞こえる」「お会いしたこともない先達の声が聞こえる。それがとても尊い」と次々に言われた。彼らには、室町時代や江戸時代や明治時代の先達の言葉が聞こえるというのである。

それがおそらく古典を読むということの意味である。私たちは誰でも、死んだ祖父母、死んだ父母と心のなかでしばしば対話する。人生の岐路に立たされたとき、「おやじ、どうしたらいいんだ、教えてよ」と言うと、心のなかで父親が応答してくれる。そういう経験はみなが多かれ少なかれ持っているが、実際には、会ったこともない歴史上の人物とも対話することができる。いや、対話しなければならない。そして古典を深く読むとは、そういうことなのである。

『若きヴェルターの悩み』はゲーテの出世作である。これは失恋を描いた小説で、これを読んだ人はきっと涙を流すだろう。しかし涙を流し、ゲーテの他の作品も読んでみよと思う人と、そう思わない人がいる。そう思わない人にとって『若きヴェルターの悩み』は人生の単なる通過点でしかない。他方、ゲーテの他の作品も読み、ゲーテとお付き合いしはじめ

た人にとって、ゲーテは親しい人になる、近所のおじさんになる。そしてゲーテにのめり込むようになった人にとっては、ゲーテは人生の師匠になる。いろいろと教えてくれる先生になる。文学でなく哲学や音楽でもいい。古典というものは、人々の人生に寄り添い、助言を与えてくれるものなのである。

(3) 渡辺一夫のラブレール研究

ゲーテは今から 200 年くらい前まで生きていた人であり、現代との共通点も多い。だが、それより前になればなるほど、現代との共通点は少なくなり、対話はより難しくなる。ルネサンス期のフランスにフランソワ・ラブレール (1483 年頃～1553 年) という作家がいる。『ガルガンチュワとパンタグリュエル』が有名だが、これらが有名になったのは、東京大学の渡辺一夫 (1901 年～1975 年) という先生がこれを邦訳してくれたおかげである。フランスは今ではフランス語で統一されているが、ラブレールの時代にはさまざまな言語が入り乱れ、またフランス語にもさまざまな方言があり、統一されたフランス語はまだなかった。公式文書はすべてラテン語で書かれ、『ガルガンチュワとパンタグリュエル』のようにフランス語で書かれたものは少なかった。当然、その判読は困難をきわめた。渡辺一夫は長い年月をかけてそれを判読し、邦訳した。この邦訳は、同書の現代フランス語訳よりも見事だと言われるほどの出来栄で、そのおかげで現代のわれわれは『ガルガンチュワとパンタグリュエル』を難なく読むことができるようになった。そしてラブレールの当時のヨーロッパ社会批判には現代社会批判に通じるものがあると知ることができるようになった。

ラブレールが生きた 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけてのフランスは、フランス・ルネサンスが栄えるとともに、カルヴァンの宗教改革の波が広がった時代、隣国スペインから派遣されたコロンブスが新大陸を発見した時代だった。それは、ヨーロッパ近代の始まりを告げる動乱の時代、大国と大国がたがいに鎬を削りあい、また国王の世俗権力と教会の宗教権力が対立する時代だった。同時にそれは、国王や教会の聖職者たちが酒池肉林の放蕩三昧に耽っていた時代、宗教的対立のあまり残酷な衝突や殺戮が繰り返された時代、大航海に加わった者たちが新大陸の原住民を殺害し、財宝を盗み取っていた時代だった。そのような時代を憂い、それに立ち向かうためにラブレールが用いた武器は言葉だった。彼は『ガルガンチュワとパンタグリュエル』をラテン語ではなくフランス語で書いた。ラテン語が分からない一般読者にも読めるようにするためである。そしてその言葉を支えていたのが、ルネサンス文化を支える人文主義の精神、ヒューマニズムとも呼ばれる人間重視の精神だった。

渡辺一夫がラブレールの翻訳を生涯の仕事にしたのは、彼が戦争中の政府と軍部に対する強い批判の念をもっていただからだった。彼は、太平洋戦争に突き進んでいく日本の愚行を、ルネサンス期のヨーロッパの愚行に重ね合わせて見ていた。そして渡辺一夫にそういう批判の眼を与えていたのは、ラブレールが体現する人文主義の精神だった。人文主義はイタリア・ルネサンスで誕生し、ラブレールやエラスムスを経てルソーやゲーテに受け継がれていった。しかし 20 世紀になると、ドイツではナチズムが、日本ではファシズムが、そしてソ連

ではスターリニズムが登場し、人文主義はふたたび存亡の危機を迎えるようになった。



『ガルガンチュワとパンタグリュエル』は今から 500 年近く前に出版された書物である。大昔のフランス語を苦労して訳したことは偉いが、そんなことをしても何の役にも立たない、渡辺一夫のラブレー研究はまさに「虚学」である、という説がある。しかし、それは間違いである。現代では人間があまりにも軽視されているからこそ、人間を重視した人文主義の精神を甦らせる必要があるのだ。渡辺一夫の仕事はまさに現代の要請にそったものだったのである。

『ガルガンチュワとパンタグリュエル』より
Public domain, via Wikimedia Commons

(4) ゲーテは現代の問題に答えている

① 誰が現代の諸問題に答えてくれるのか

もしもラブレーやエラスムス、ルソーやゲーテが、20 世紀前半のナチズムやファシズムを見たら何と言うだろうか。原爆投下を知ったら何と言うだろうか。冷戦や核開発競争を見たら何と言うだろうか。ベトナム戦争や湾岸戦争を見たら何と言うだろうか。成田空港建設が引き起こした三里塚闘争を見たら何と言うだろうか。住宅ローン問題からリーマンショックや世界大恐慌が起きる現代の資本主義社会を見たら、地球温暖化のことを知ったら、クローン羊「ドリー」のことを知ったら何と言うだろうか。そして、東日本大震災と福島原発事故を見たら何と言うだろうか。

ラブレー、エラスムス、ルソーらもこれらの問いに答えてくれるかもしれないが、上記の人たちのなかでこれらの問いに一番答えてくれそうなのはゲーテである。そしていくら時代が経っても、現代に生きる人たちの胸にいまだに響く言葉を届けてくれるものが、古典と呼ばれるのである。

私は、1974 年に初めてドイツに行った。ベルリンで諸外国の若手のゲルマニストたちと机を並べて学んだ。そのとき諸外国の人たちに「高橋さんは何を研究しているのか」と聞かれたことがある。ゲーテ自然科学を研究していると答えると、一人のフランス人に、それは今の流行だ。環境汚染で近代化のあり方を再考しなければならなくなったとき、東洋にはきつといろいろな賢人がいると思うが、西洋には残念ながらゲーテしかいないのだ、と言われた。水俣病など、環境汚染が問題になりはじめた頃の話である。あれから 40 年近く経ったが、このフランス人はその後のヨーロッパの環境問題をどのように見ているだろうか、と思う。

② 17 世紀の科学革命以降の科学のあり方を考える

ご存じのように、ゲーテは文学者であるばかりではなく、科学者、政治家、哲学者でもあ

った。こういう多面性があったからこそ、ゲーテはヨーロッパの将来、人類の将来について考えることができた。それは「ゲーテ自然科学の集い」の会員だった科学者たちの場合も同じで、彼らは科学者であるからこそ、科学者の科学的責任について深く考えた。

ゲーテは1749年の生れである。彼が生れる一世紀前の17世紀にヨーロッパではいわゆる「科学革命」が起きた。科学革命を起こしたのは、ポーランドのコペルニクス（1473年～1543年）、ドイツのケプラー（1571年～1630年）、イタリアのガリレイ（1564年～1642年）、イングランドのニュートン（1642年～1727年）の4人だった。コペルニクスとケプラーは天動説から地動説へ、従来の宇宙観を大転換させた。自由落下運動の法則と万有引力を発見したガリレイとニュートンは、近代的な機械論的自然観を打ち立てた。それによって人々の生活はガラッと変わった。望遠鏡や顕微鏡などが発明され、人々は部分を観察することに努力を傾注した。そのことはすばらしいことだが、しかし部分ばかり見ていると、全体像を見失いやすい。全体は単なる部分の集合ではない。それを忘れてはならない。そうゲーテは警告した。ゲーテは、数学が自然現象の理論づけに用いられるようになったことにも懸念を示した。数値ばかりを信じて、自分の感覚を信じない人が増えた。そのことにゲーテは繰り返し警鐘を発している。

ゲーテの晩年には産業革命が英国からヨーロッパ大陸にも入ってきた。当初、ゲーテは機械が多くのことをなしとげるのに驚嘆したが、やがて機械産業が人々を圧迫し、人々の生活を悲惨にすることを深く憂慮するようになった。高等研の基本理念である「人類の未来と幸福のために何を研究すべきか」に引き付けて言えば、科学文明は人類を「幸福」にするどころか、むしろ不幸にしているというのである。

今はコンピューターとインターネットの時代である。それが私たちの生活を便利にしたことは否めない。しかしインターネットを通して気楽に人々とつながれるようになった反面、仲のいい人との友情を深めることは少なくなった。そして人々はコンピューターや携帯電話の画面ばかり眺め、本を読むことが著しく減った。そういうことを批判的に考察することも必要である。そしてゲーテは、科学革命や産業革命の時代に、新しい時代の動きを批判的に考察した。そう考察できたのは、彼に人文主義の精神があったから、文明の進歩や工場の収益よりも人間の幸福を願う気持ちがあったからである。

③ EUの基になった「世界文学」の試み

晩年のゲーテは、「世界文学」というものを提唱した。日本には「世界文学全集」と言われるものがあるが、その言葉を初めて作ったのはゲーテである。しかしゲーテの考えは、「世界文学全集」の「世界文学」とは大きく異なっていた。「世界文学全集」とは、世界各地のさまざまな文学の網羅、寄せ集めである。それに対してゲーテは、文学を通して世界をひとつにしようとした。彼の考える「世界文学」は世界平和計画につながるものだったのである。

ゲーテの「世界文学」は二段階からなる。ドイツ文学、フランス文学、イギリス文学といった各国別文学の枠を取り払った「ヨーロッパ文学」を作るのが第一段階である。次にその

試みを世界全体に広げて「世界文学」を作る。これが第二段階である。政治的・軍事的に世界をひとつにするのが難しいことはよく分かっている。しかしまず文学の世界、文化の世界で世界をひとつにすることはできるのではないか。そうすれば、政治面でも世界は次第にひとつになっていくのではないか、これが世界平和をもたらすために自分にできることだ、と彼は思ったのである。

ゲーテの「世界文学」の試みはEUにつながっている。「世界文学」構想の第一段階の「ヨーロッパ文学」を作るというゲーテの試みを実現したのが、EUだった。次の課題は、このEUをさらに拡大することである。しかしその前に立ちはだかる障壁は大きい。特に大きいのは、ロシアとの関係、さらにはパレスチナ問題である。世界平和をどうやって実現するかということは、われわれがゲーテから受け継いだ課題のひとつである。

(5) 答えは『ファウスト』の中にある

科学と人間、文学と世界平和、これらの問題にゲーテはすでに『ファウスト』第二部のなかでかなり答えている。『ファウスト』第二部は、近代文明に対するゲーテの警告の書である。『ファウスト』第一部、第二部の正式なタイトルは、『ファウスト 悲劇第一部』と『ファウスト 悲劇第二部』である。では『ファウスト』はなぜ悲劇なのか。第一部が悲劇であることは明白である。ファウストはグレートヒェンと恋仲になる。グレートヒェンはファウストの子どもを宿すが、ファウストが姿を消してしまったため、父なし子を産むことを恐れ、嬰兒を殺し、殺害の罪によって死刑になる。むごたらしいほどの悲劇である。

それに対して、『ファウスト 悲劇第二部』はどこまで悲劇なのか、分かりにくいし、第二部を悲劇と見なさなかったゲーテ研究者も多い。従来のゲーテ研究者の多くは、第二部を悲劇ではなく、ハッピーエンドに終わる話だと見てきた。ファウストは永遠に努力しつづける存在である。そんなファウストが、その努力によってついにメフィストという悪魔に打ち勝つ。それが第二部だというのだ。しかし本当にそうだろうか。ファウストが世の中をよくしようとして必死に努力したことは確かである。しかし彼がいくら努力しても、彼の営為のすべてはメフィスト・フェレスの手中にあり、そのため、ファウストが世の中をよくしたいと思っても、結局は世の中を悪くすることにしかない。

そういうことは世の中にたくさんある。ノーベル賞で名高いアルフレッド・ノーベルがダイナマイトを作ったのも、それが採掘工事や土木工事に役立つだろうと思ったからだ。だが、実際にはダイナマイトは短時間に多くの人々を殺傷する戦争の道具として使われるようになってしまった。第二次大戦中にはオッ



Goethe: Faust. Berlin, Rütten & Loening, 1982

ペンハイマーが、戦争を早く終わらせようとして原爆を作ったものの、それは広島・長崎の惨禍をもたらし、人々が核の脅威に怯える悲惨な世の中をつくってしまった。ノーベルやオッペンハイマーと同じように、世の中をよくしようと思って行動しながらも結局は悪い世の中をつくってしまったのが、ファウストだった。そしてゲーテは、それが人間、特に近代人の宿命だ、と考えていたのである。つまり『ファウスト 悲劇第二部』とは、近代人に起こりがちな悲劇なのである。

II 『ファウスト』に見る近代科学批判

(1) 近代経済学は錬金術である

では『ファウスト 悲劇第二部』で、近代はいかに悲劇的に描かれているのだろうか。

第二部には 4 種類の近代文明批判が描かれている。ゲーテは、近代科学は新手の錬金術ではないか、と疑っていた。錬金術は怪しげな学問である。ところが、ゲーテは、皆が絶対視している近代科学がじつは新手の怪しげな学問かもしれない、よく見張ってみよう、と言っている。ファウストとともに現れたメフィストフェレスはいろいろな儲け話、うまい話を持ちかける。それを聞いた人々は、「星占いだ、錬金術化学だ」と囃し立てる (4974 行)。いかがわしい連中ではないか、というのである。

4 種類の錬金術的な近代科学の第一は近代経済学である。『ファウスト』第二部第一幕の舞台は神聖ローマ帝国の宮廷である。帝国が拠って立つ古典的経済学では、人々が労働することによって経済は発展する。古典派経済学からすれば、労働のなかには喜びがある。労働することによって自分の小さな世界 (マイクロコスモス) が会社や社会というマクロコスモスに拡大され、合致するのを体験できる。労働は尊い。古典的経済学はそう考えていた。

ところが今や帝国は財政危機に陥っている。みなが働かなくなったわけではないのに、古典的経済学によるだけでは帝国の不景気は一向に改善されない。みな、お手上げの状態である。国家財政が火の車だと知らされた皇帝は、ほとんど捨て鉢に言う。

金^{かね}が足りないのなら、仕方ない、さっさと金^{かね}をつくれ。 (4926 行)

そう言われたメフィストとファウストは、紙幣を大量に発行すればいいんだ、と教える。教えられた皇帝と大蔵卿は、危険な誘いに乗り、労働が尊いという従来の古典的価値観を捨ててしまう。もうあくせく働かなくともよい、金融操作で金を儲ければいいんだ、と方針を切り替える。ただし紙幣を発行するにはそれ相応の担保がある。帝国にそのような担保はない。その懸念に対して、メフィストはこう提言する。帝国は広大な領土を持っている。その領土のなかを探せば、どこかでそのうち貴重な地下資源が見つかるだろう。地中に埋まっている財宝を担保にしよう。いつの日か地中から財宝が発見されると予想し、その財宝を担保として紙幣を発行すればよい、と (4937 行以下)。むろん、そのような財宝が発見されると

いう当てはない。したがってこの紙幣は、ゲーテ時代にはまだなかった不換紙幣であり、メフィストが提案しているのは危険な金融政策である。日銀が次々と紙幣を発行している今日の日本と同じように、『ファウスト』悲劇第二部において神聖ローマ帝国も金融政策を大きく変更し、不換紙幣を大量に発行することになる。

不換紙幣の大量発行こそメフィスト的錬金術にほかならない。奇蹟か魔術のような金融政策に人々は眩惑される。帝国はそれまで多量の借金に苦しんでいたが、不換紙幣を大量に造幣すると、借金も、兵隊への未払いの給料もまたたく間に片づいてしまう(6041行以下)。いかがわしい金融政策の大勝利である。

宰相は、不換紙幣に関する法令を読み上げる。

知りたい者には教えよう。

これなる紙切れは千クロネの値打ちがある。

帝国領土内に埋まっている

無数の宝がその担保だ。

(6057-6060行)

不換紙幣の大量発行によって、帝国は突如として景気がよくなり、人々は好景気に浮かれる。ごく普通の市民でも、紙幣さえあれば、森だって城だって買うことができる(6169行)。人々は、働かずに富を手に入れようと、一攫千金の危険な魅力に取りつかれる。1986年から1991年まで日本が陥ったのと同じバブル景気である。バブル景気に浮かれ騒ぐ人々の愚かさ、滑稽さが『ファウスト』悲劇第二部第一幕にたっぷりと描かれる。メフィストは皮肉まじりに語る。

幸福が日々の稼ぎとつながっていることが

馬鹿者どもには少しも分らない。

奴らが賢者の石を持っていても、

それはただの石ころさ。

(5061-5064行)

日々真面目に働くことが幸福だというのは、古典的経済学である。この世の中を不幸にしてやろうとするメフィストは、労働が幸福だということを人々に失念させ、人々をバブル景気に浮かれさせようとする。メフィストの目論見はまんまと当たる。彼はここで「賢者の石」に言及しているが、「賢者の石」とは錬金術のモチーフである。不換紙幣こそ新手の錬金術によって作られた「金」である。ファウストの父親は錬金術師であり、彼は「金」ならぬ新薬をつくったが、それによって患者は次々と死んでいった。そして今や金融政策という新手の錬金術的経済は国中に「悲鳴と混乱」(5747行と5748行の間)をもたらす。メフィストの勝利、時代の悲劇である。

ファウストは、不換紙幣の大量発行によって帝国内にインフレーションが起きると何度

も警告を発している。彼は、地上に富をもたらす神プルトゥス——すなわち不換紙幣の発行によって富をもたらす神——となって現われる。黄金の沸きかえる鍋のなかから、首飾りや指輪や金貨が次々と溢れ出てくる。みながそれを取ろうとすると、火の粉が飛び散り、人々は火傷しそうになる。みなに十分にお灸をすえたところで、プルトゥスは火を消す（5709-5762行）。皇帝も同じ目にあう。焰の泉のなかで黄金が火となって輝いている。泉の水は真珠の泡となって左右に飛び散る。皇帝が身をかがめて、黄金の火を嬉しそうに覗きこんでいると、仮面のひげが落ちて、燃え上がる。落ちたはずのひげが舞い戻ってきて、皇帝の身体は火だるまになる。みなは、これで帝国の栄華も終わる、と大慌てする。恐怖が十分に広まった後で、プルトゥスの魔法がすべてをおさめる（5920-5986行）。バブルはいずれはじける。一攫千金を夢みた人々は、結局のところ大火傷を負い、自分たちが愚か者であったことを思い知る。

（2）近代生化学は錬金術である

『ファウスト』第二部に出てくる第二の錬金術は、人造人間の生化学的製造である。この人造人間にはホムンクルスという名前がついている。ホムンクルスとは、パラケルススの著作のなかにたびたび出てくる人造人間の名前で、パラケルススは『物の本性について』のなかで、ホムンクルスを錬金術方法によって作り出す過程を以下のように記している。

さてホムンクルスの発生のもも決して忘れてはなるまい。というのも、これは肝心かんじんな問題ちんたいであって、従来ホムンクルスなるものを生み出せるかもしれないということとは、秘中の秘として押し隠されてはきたものの、何人かの老哲学者のあいだでは、女性の身体や、自然のままの母親の外部でも人間は生れうるものなのだろうかという問に対しては、もはや疑いを挿む余地がなかったからである。私はこう答えよう、ホムンクルスは錬金術（Kunst spagirica）にも自然にも背くものでは決してなく、それどころか、それを生み出すことは十分に可能なのだ、と。ではその発生はどのようにして行われるのだろうか。その製造過程は次の通りである。男性の精液を、きわめて腐敗性の高い密閉された瓢箪型ひょうたんの馬の子宮のなかで40日程度かけて腐らせてやると、やがてそれは——容易に見てとれようが——生き生きと動き出し、活動しはじめる。しばらくすると、それは人間に或る程度似てくるけれども、まだ透明で、身体を欠いている。しかし、その後毎日きわめて慎重に人血の秘薬を与え、馬の子宮内と同じ温度のなかで40週間養ってやると、本当に生きた人間の子供になる。それは女性から生れた他の子供と同じように、手足をすべて備えてはいるものの、しかしずっと小さい。この生き物をわれわれはホムンクルスと名づけることにしよう。ホムンクルスは誕生した後、一定の年令に達して知性を得るまで、他の子供と同じように熱心に注意深く育てられなければならない。これこそは、罪ふかく、死すべき人間に神が教えてくれた最高にして最大の秘密のひとつである。というのも、これこそは奇跡ないしは神の偉業であり、ありとあらゆる秘密



Homunculus (Goethe's Faust part II.)
Public domain, via Wikimedia Commons

にまさる秘密だからである。隠しておくものは何もなくなり、すべての秘密が明るみに出される日が来るまで、これは何といても秘密のままにしておかなければならないのだ¹。

人造人間の製造という着想は、すでに16世紀からあったもので、ゲーテはそれを利用した。では彼は本当に人造人間を作ろうとしたのだろうか。彼は人造人間の製造を肯定していたのだろうか、それとも否定していたのだろうか。

『ファウスト』のなかでホムンクルスを製造するのはファウストではなくて、ファウストの不肖の弟子ヴァーグナーである。しかもヴァーグナーによるホムンクルスの製造にはメフィストが手を貸していることが暗示されている(6831行)。ここにすでにゲーテ自身が人造人間の製造に対して取っていた批判的な視座が示されている。しかも興味深いことに、ホムンクルスの製造は錬金術の方法にもとづいて行なわれる。竈に向かいながらヴァーグナーはこう言う。

ご覧なさい。光っていますよ。もう大丈夫だ。

数百もの物質を調合して、

むろん、この調合の仕方が難しいのですがね、
徐々に人間の原質をつくりあげるのです。

レトルトのなかに密封して、

適度に蒸留してやる。

すると仕事はおのずからでき上がるのです。

(ふたたび竈に向かって)

そら、生まれてきましたぜ。澄んだ塊りが動き出した。

私が確信していた通りだったのだ。

これまで自然の神秘として讃えられてきたことを、

悟性の力でやりとげ、

自然がこれまで有機的に生み出してきたものを

結晶化作用によって作り出してやるのだ。

(6848-6860行)

¹ Paracelsus: De Natura Rerum. Paracelsus: Opera. Bücher und Schriften, so viel deren zur Handt gebracht [...]. Hrsg. von Johannes Huser (=Husersche Quartausgabe), Bd. VI, Basel 1590, S. 263f.

ヴァーグナーが作り出したものは、レトルトのなかに密封された「人間の原質」である。それは錬金術における処女土、今日の生化学における蛋白質に当たる。しかし、処女土が男性的な硫黄でも女性的な水銀でもないように、ホムンクルスという人間の原質は男でも女でもない。それはまだ被造物の前の段階にあり、そのため「不思議なことに、まだ半分しか生まれていない」(8247行以下)。彼はまだレトルトのなかに閉じ込められており、男でも女でもないからだ。しかも「今のところホムンクルスにはガラスの重さしかなくて、だから何よりも身体をほしがっている」(8251行以下)。

身体のない存在、男でも女でもない存在なら作り出せるかもしれない。だが、それだけでは人造人間を作り出したことにはならない。ゲーテが言いたいのは、人造人間の製造などを試みても、その試みは半分しか成功しないということである。

『色彩論』歴史篇のなかでゲーテは、錬金術を「迷信」として片づけながら、「もしも錬金術の詩的な部分とでも言えるものを自由闊達に取り扱うことができれば、それはさぞかし楽しい考察へとわれわれを導いていってくれるだろうし、いくつかの普遍的な概念を駆使し、かつそれにふさわしい自然を基盤に置いて、一篇のメルヘンをつくることすらできるだろう」(FAI-23-1, S.663)と記している。そして『ファウスト』悲劇第二部の第二幕こそ、ホムンクルスという詩的な創造物について普遍的な概念を駆使し、しかもそれにふさわしい自然を基盤に置いて作られた一篇のメルヘンにほかならない。しかし、このメルヘンの終幕はハッピーエンドではない。ホムンクルスは人間となって生まれ出たいと願いながらも、その願いを達することはできず、彼を包んでいたレトルトは壊れて、彼は海中に流れ出し、消えていってしまう。人造人間を作り出そうとする生化学的な試みは悲劇に終わった。ノーベル文学賞に輝いたカズオ・イシグロは長編小説『わたしを離さないで』(2005年)のなかでクローン人間がたどる悲劇を描いたが、それに似た悲劇が『ファウスト』におけるホムンクルスの最期だったのである。

(3) 近代の機械産業は錬金術である

近代の第三の錬金術は、産業革命とも呼ばれる機械産業である。ゲーテの晩年、イギリスで起きた産業革命の嵐はヨーロッパ大陸に上陸した。蒸気機関の発明とともに、蒸気汽船と蒸気機関車が発明され、イギリスではすでに実用化されていた。ゲーテは速度がものを言う時代がやってきたのを知った。それと同時に彼を憂慮させたのは、家内制手工業が工場制手工業に、そして工場制機械工業に変わりつつあることだった。家内制手工業に勤んでいたのは主に女性たちだったが、女性たちの手仕事であった糸紡ぎや機織りが消滅し、人々は工場に通うようになり、工場で働き、そこで機械の奴隷と化す時代が訪れた。そういう時代に人々ははたして幸福になったのであろうか、それとも不幸になったのであろうか。

それを、ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のなかでつぶさに描いた。ゲーテはこの小説を一度は書き上げたものの、その後、産業革命のドイツへの到来とともに、それをもう一度大幅に書き直し、産業革命に対する強い憂慮の念を表明した。『遍歴時代』

のなかで登場人物のひとり、次のように述べている。

とめどもなく拡がってゆく機械産業が私を苦しめ、不安にします。それは雷のようにやってくるのです、ゆっくりと、ゆっくりと。でも方向はすでに決っています。それはいずれやってきて、私たちを襲うでしょう。(FAI-10, S.713)

ゲーテからすると、産業革命は人間から人間性と自由を篡奪する出来事だった。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』のなかには、そういう時代に絶望して、アメリカに移住する一家が描かれている。登場人物の一人は、機械産業の到来したヨーロッパ、人口の過剰に苦しむヨーロッパに苦しんだ挙句、アメリカへの移住を決意する。産業革命とアメリカ移住の関係を知る上で、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』はまことに貴重な歴史的史料でもある。

機械化の導入によってものの生産は大幅にスピードアップした。生産過程が機械化されたことによって人々は労働から解放されたのならよかったのだが、実際には機械を使って生産量を増やすことができるようになったため、人々の仕事はかえって忙しくなった。手仕事が多かった時代には丁寧な仕事が重視されたが、機械が均一な商品を作り出すようになった結果、各工場はたがいに速さを競うようになった。

こうして近代文明の発展は速度を争う時代を生み出した。産業界においてばかりではない。戦争においても速度が重要になる。『ファウスト』悲劇第二部の第四幕では皇帝と対立皇帝の戦争が始まる。ファウストとメフィストは皇帝側に味方し、メフィストは、選りすぐりのやくざ三勇士を呼び出す(10323行以下)。喧嘩男、早取り男、握り男の三人である。早取り男(Habebald)には早奪い女(Eilebeute)という連れがいる。彼ら四人はいずれも強欲の持ち主である。喧嘩男は喧嘩を売って物を手に入れようとする。早取り男と早奪い女はできるだけ早く獲物を取り、奪おうとする。握り男は、手に入れたものはしっかりと握って決して手放さない。作者の隠された意図は明らかである。彼は、この三勇士のように金欲に目が眩んでいるのが近代人の特徴だと言いたいのだ。金欲だけなら近代以前にもあっただろう。しかし近代に特徴的なのは、金欲が速度と結びついていることである。戦争に勝って、分捕り品を手に入れようとして最初に駆けつけるのは、喧嘩男でも握り男でもなく、早取り男と早奪い女である。速度が金欲に拍車をかけ、より速い者が勝利を収めるのである。

早取り男と早奪い女は「金欲+速度」の擬人化である。第四幕の冒頭でメフィストは七里靴をはいて登場する。七里靴も速度の象徴である。第五幕には、「脚の速い船」(11165行)も出てくる。ゲーテは近代を特徴づけるものは「富と速度」であると考えていた。ツェルター宛の書簡(1825年6月6日)のなかに彼はこう記している。「若い人たちは刺戟を受けるのが早すぎますし、やがて時代の渦のなかに巻きこまれてしまうことでしょう。富と速度こそ世の賞賛的であり、誰もがそれを目指して躍起になっています。鉄道、速達便、蒸気船、コミュニケーションのための便利な道具こそ、知識層が目指すもので、彼らはたがいに競い、

行きすぎ、その結果、月並みになってしまいます。中間階級の文化が卑俗になってしまうのも、大衆化の結果です」(FA II-10, S.277)。ここで速度の例として鉄道、速達便、蒸気船、そしてコミュニケーションのための便利な道具が挙げられている。コミュニケーションのための便利な道具とは、その後、電話や電信やインターネットとなって実現する。ゲーテはここで近代の特徴を見事に言い当てている。金(資本主義)は紙幣の発行によって、速度は科学技術の進歩によって可能になった。速度は近代文明の特徴である。しかし、それは同時に近代人の心性をも特徴づけている。近代人はいつでも忙しく、いつでも落ち着きがない。だからファウストは「いつでも不満」(11452行)である。不換紙幣の発行に加担し、早さ(速度)を象徴するメフィストの部下の力を借りて皇帝の敵軍を撃退したファウストは、悪魔的な近代文明そのもののなかに呑み込まれている。彼はすでに近代資本主義の一翼を担わされている。『ファウスト』悲劇第二部に描かれているのは、近代資本主義の悲劇なのである。

(4) 近代の土木事業は錬金術である

『ファウスト』第二部に出てくる第四の錬金術は近代の土木事業である。田中角栄の「日本列島改造計画」にならって言えば、「ドイツ国土改造計画」である。『ファウスト』の第二部終幕(第五幕)の主題は海の干拓事業である。ドイツの北海岸には広大な浅瀬が広がっている。ここを干拓して、海を陸地へと錬金術的に変化させようとする計画である。この干拓事業によって人々の住める広い土地を確保したい、それは人々のため、社会のためになる高邁な仕事となるだろう、とファウストは考えた。しかしゲーテの慧眼は、近代人が「善意」で行なう公共事業が少数者の犠牲の上に成り立っていること、それどころかその公共事業によって美しい自然が著しく破壊されかねないことを鋭く見抜いていた。

公共事業の犠牲になる少数者には、オウィディウスの『変形譚』にならってフィレモンとバウキスという名前が付けられている。第五幕の冒頭では一人の旅人がこの老夫婦を訪れる。二人の住む小屋のそばには菩提樹が立っている。ドイツ人にとって菩提樹は、自然に包まれた平和な牧歌的生活の象徴である。実際、フィレモンとバウキスは菩提樹のもとで静かな田園生活を営んでいる。自然と自然に対する愛に包まれた生活がまず牧歌的な楽園として描かれている(11043-11058行)。しかし公共事業という名のもとの土木事業はこの地を襲い、この楽園を破壊してしまう。フィレモンとバウキスはもともとは海辺に住んでいた。ところが再びこの地を訪れた旅人がかつてそこにあったはずの海の方を見ると、そこはすでに陸地になっている。自然はすでに近代文明によって征服されてしまっているのである。ファウストは、フィレモンとバウキスの住む場所が自分のものでないことを苦々しく思う。

俺の眼の前には広大な領地が広がっているが、
俺の背後には不快なものがあり、
あの鐘の妬み深い音が思い出させる、

俺の領地はまだ完全ではなく、
菩提樹、茶色の板小屋、
朽ちた礼拝堂はまだ俺のものではない、と。 (11153 行以下)

そこでファウストはこう呟く。

あそこに住んでいる老人たちを立ち退かせ
菩提樹の立っている場所も俺のものにしたい。
俺のものになっていないあの数本の木々が、
俺の世界所有の邪魔になっている。 (11239 行以下)

「俺の世界所有」という言葉に注意しなければならない。ファウストはもともと学問に飽き足らず、大世界と小世界の合致をめざして、大世界へ乗り出していった。その結果、彼がたどりついたのは、自分の領土の拡張という資本主義的な欲望の膨張だった。彼はじつは、ファウストを欲望の虜にしてやろうと目論んでいたメフィストに完全にしてやられているのである。

ファウストの呟きを聞いたメフィストはフィレモンとバウキスの住む小屋に火をつけ、二人を菩提樹ともども焼き殺してしまう。菩提樹に象徴されていた牧歌的世界も自然も破壊される。こうして近代文明が勝利を収める。フィレモンとバウキスの殺害は、ファウストが直接に手を下したものでこそないが、だからといってファウストに責任がなかったとは言えない。いや、ファウストのなかにあった資本主義的な欲望こそが、二人の殺害の真の元凶だったのかもしれない。

二人が焼き殺されるさまを眺めていた塔守のリュンコイスは歌う。「かつてはみな美しかったのに」(11303 行)と。『ファウスト』の上演の際には、普通この場面に痛切な哀惜の念をこめられる。リュンコイスの歌を聞いた観客は、牧歌的な美しい世界がすでに過去のものとなってしまった、とリュンコイスとともに慨嘆するのである。

フィレモンとバウキスが焼き殺されたことを知ったファウストは自らの罪に気づいて愕然とし、憂いとメランコリーに捉われる。その憂いによって彼は盲目になる。彼が盲目になったのは、ギリシア悲劇のオイディプス王のように、彼の自発的な意志だったのかもしれない。自分が人々のためによかれと思ってしたことがじつは人々に不幸をもたらしただけとは、何とつらいことだろう、俺はもう何も見たくない、何も聞きたくない、と彼は思っていたにちがいないのだから。このように、ファウストがよりよき未来のために行なった試みはすべてより悪しき事態を招いてしまう。『ファウスト』悲劇第二部が悲劇であるのは、まさにそのためである。

以上、見てきたように、『ファウスト』第二部は近代批判、あるいは近代科学批判の書で

ある。そこでは第一に近代経済学という錬金術が、第二に近代の生化学という錬金術が、第三に機械化という錬金術が、そして第四に近代公共事業という錬金術が批判されている。第一の錬金術は人間の自然な労働意欲をそぐものであり、第二の錬金術は人間の自然な生殖を否定するものであり、第三の錬金術は人々の平和な生活を奪うものであり、そして第四の錬金術は、自然そのものに対して暴力を揮うものである。つまりこれら四種類の近代錬金術はいずれも「反人間」と「反自然」にほかならず、『ファウスト 悲劇第二部』におけるゲーテの批判は、反人間・反自然としての近代そのものに向けられている。反人間・反自然である芝居がハッピーエンドに終わるはずがない。『ファウスト』は悲劇に終るよう、最初から定められていたのである。

発行日	2023年11月30日
講演著者	高橋 義人
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)